

## 時代を超えて今も蘇る 大町桂月の足跡

大町桂月が初めて十和田湖を訪れたのは、明治41年8月。今から100年余り前のことです。雄大に広がる湖畔の景色に感銘した桂月は、その想いを紀行文や文芸作品に発表。十和田湖や奥入瀬溪流などを広く世に紹介しました。また、十和田湖の国立公園指定に尽力するなど、今日の十和田湖観光の礎を築きました。桂月が詠んだ歌は、時代を超えてたくさんの人々に愛され、多くの文学碑が市内に点在しています。

豊かな筆才と美文で山水の秘境を広く世に紹介した大町桂月

「住まば日本 遊ばば十和田 歩きや奥入瀬 三里半」の歌で知られる明治の文豪、大町桂月。明治41年8月に初めて十和田湖を見た桂月は、その雄大さや自然の美しさに感動し、雑誌「太陽」に紀行文を掲載。十和田湖、奥入瀬を全国に印象付けました。

桂月は、「一寸見残してきたことに気が付くと、疲れた脚、暮れかかるときをも構わず、一里二里と後戻りしても窮め尽くして来る」と言われるほど人一倍旅への想いが強かったようです。

その後も十和田湖や奥入瀬、八甲田の美しい自然と人情に魅かれ、何度も蕨温泉を訪れ、東北各地の山水を探勝しています。大正12年、13年には長期にわた

り、蕨温泉旅館に滞在し、「蕨温泉帖」や「冬籠帖」など数多くの文芸作品やスケッチを残しています。晩年の大正14年には、本籍を鳥に移し、「極楽へ こゆる峠のひとやすみ 蕨のいで湯に 身をばきよめて」と辞世の歌を遺し56歳の生涯を閉じています。

十和田湖の国立公園指定に尽力

昭和11年2月、十和田湖は国立公園に指定されました。桂月はこの指定に力を注ぎ、大正12年に起草した「十和田湖ヲ中心トスル国立公園設置ニ関スル請願」の請願文は、政府関係方面に大きな反響を呼び指定の気運を大いに高めました。そして、亡くなる1カ月前には、桂月の公的絶筆とされる「十和田国立公園期成会趣旨書」

を執筆しています。休屋地区の御前ヶ浜に佇む「乙女の像」は、十和田開発に尽力した大町桂月、武田千代三郎元県知事、小笠原耕一旧法奥沢村長の三功労者を讃え、昭和28年10月、当

時の県知事津島文治（作家・太宰治の兄）によって国立公園指定15周年を記念して建立されたものです。桂月は「十和田はわたしの箱庭である」を口癖に、国立公園指定に貢献しました。



— 桂月全集より  
明治2年高知県高知市生まれ。本名は大町芳衛。郷里高知、桂浜の月を想い桂月と号しています。



桂月が書いた「蕨温泉帖」

### 市内に点在する大町桂月の文学碑

#### 道の駅奥入瀬

1 かすみたる  
下界を四方に見下して  
我れひとりたつ 堅雪の山



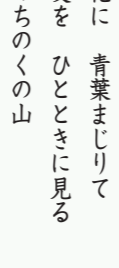
#### 焼山郵便局前

5 住まば日本 遊ばば十和田  
歩きや奥入瀬 三里半



#### 立田姫

6 錦をさらす 大敵に  
みだれてかかる 白糸の瀧



#### 3 沢沢を

すぐれば人乃里ならず  
蕨をわたりて 神園に入る

#### 4 花外は酒をのまむとて

下界をさして下りゆく  
桂月は酒をのまむとて  
尾上をさしてのぼりゆく  
花外は好む梯子酒  
痛飲淋漓千鳥足  
世のあはさなるの物語り  
花外は泣いて聞くならむ  
峰のさかなは木の子なり



#### 8 いで湯わく

蕨乃山路  
さよふけて 月のみわたる  
猿の空橋



#### 蕨温泉地内

9 世のひとの 命をからむ 蕨の山  
湯のわく處 水清きところ



10 十年あまり 五とせ前に 見しわらや  
今こそ玉のうてななりけり

11 四方の木は みな冬枯れて  
一もとあをし 蕨の鉾杉

12 ころよき 何にたとへむ 湯の中の  
顔のほてりて 雪のちりくる

13 沼に舟うけ 姫鱒釣って  
風呂で月見る 山の中

14 ころよき 何にたとへん 湯の瀧に  
肩をうたせて 冬の月見る

15 今しばし 山の錦に たてきりて  
やくし如来の 生まれいでぬる

#### 高・大町桂月の墓

16 極楽へ こゆる峠の ひとやすみ  
蕨のいで湯に 身をばきよめて  
(辞世の歌)

